

門號
5
6661
卷1

昭和二七年四月三日購求

宋花物語一

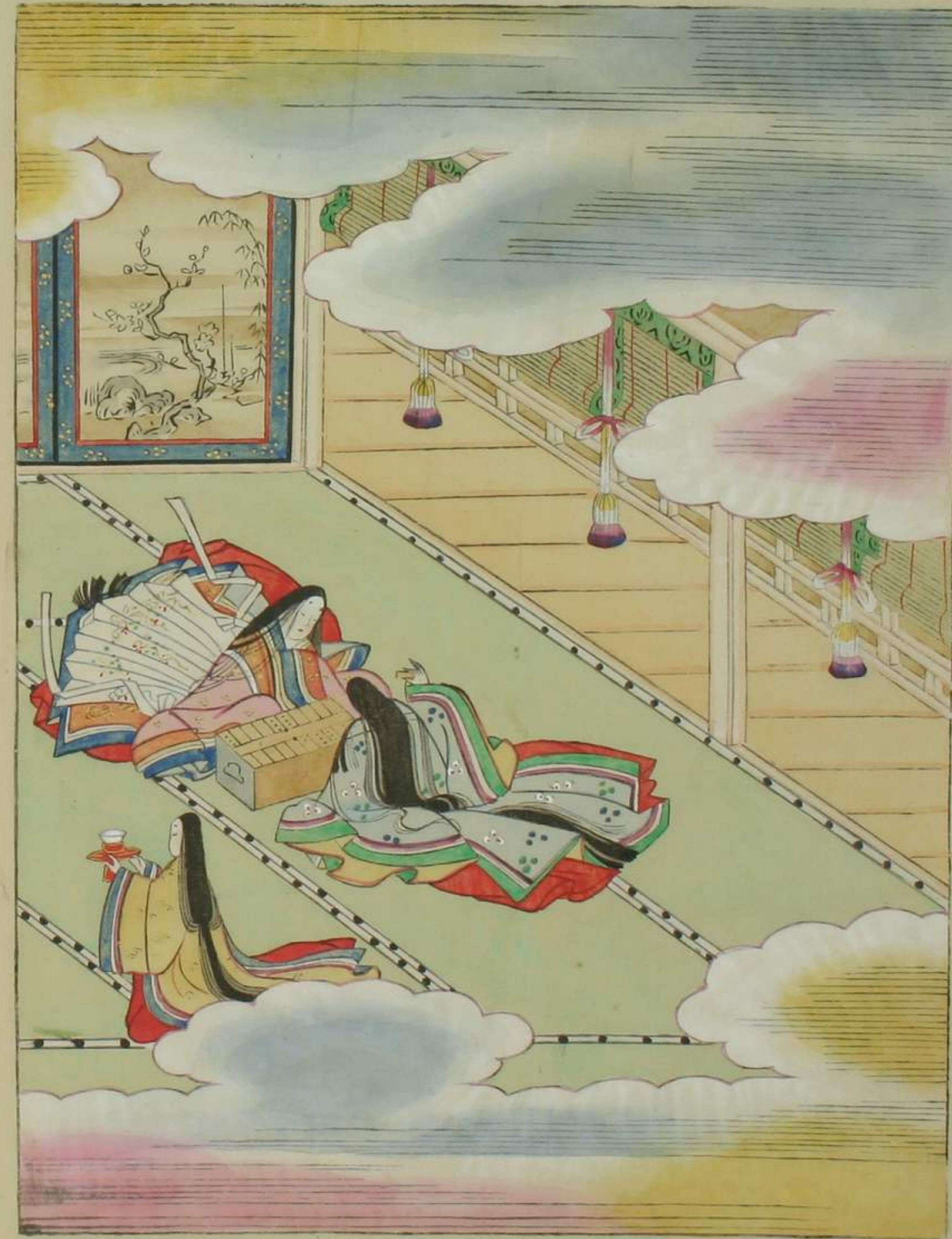


月宴

せけりてほひの門へ十歳代よりとば
つれぬかまくよすこりし
てつとふるすとせやよ宇みの門
足らむりそりとゆとじてふりの
がりまげゆふ一のて敵にの取とば
せ行風を行げとて能明も聖帝とて
せゆふめみととめゆよいとば
され行はをとてよことたりとみゆい
けよるけのせけりとくの行えりと男

足こす六人女ここうじりまきよりとれの
そ段食奉殿が此をやしけひすみ門
の内よじけ行け中幼ちもとすりは
そ段右を嗣のれと帝とてわけは
館を政右とせさやけかのれニ帝とてわ
げのとおりとつれかうを行てはすれ邊
脇宣ふにすらりとの奉殿がれし脇入
がりくらりと帝ハ内平とこうえくらだる居下て
か行て止九とせやうと行け次帝仲平也
さもけたをもうりて七十とくと
けすくらりと帝重平也さもけ三位またと
けられ帝忠平のゆゑとそ段右とて邊

村^{穂子}の年はすとと行けと奉殿がね
の女^{穂子}にけよを、このめうりゆが
けぬとめ寛明れ親とよけの門よめを
こす六年かくぬではよトとすとから
けとせ余産ほのり^村にけとすとね
せんの以後すとと成明の親とよけ行
けとて門よめをすくらりとま九ひと月す
二日ともねとおけ余産ほのめすくらりと
とくとよけとよけ母事も
見こすととくと行けふ門もとふのくよ
ややくとくとくとくとくとくとくとくとくと



りくさんとのんびりのそでにまく風もさうと
おもひだすからねよとくらうりいじつわくある
はかねぬるりきのとみくらうとくまく地
のいとむだに昂志早れりとのれどり
もとせとめりて、うてがとすとれり
めんといけをやがたのたふくとまれ
ととこみて小地あとくふく住の涼昂の在
人にて仰神のる九条とくふく住みま
と神のれきけはつるに昂仰とくはく
けん納えまとてか行けぬ昂仰事れたるに
くわえて小一系とくふく住みま

ぬこのかほされの心もとめておさん
さあげてありますひなれとの心もと
ゆくもとあります九条の仰神の
たるわざとてゆきの心方れね後よ男土人
女ふ人をりけり小地めのたちをいとの和
敷放懸齊故
三ノ谷もとがりけり女あしむり一ふも
あ後の具とてかりすゆつさひ女れもりも
次ぐらもとてかりす小一糸の仰神のまこと
木下一ふりけりとのこみ一ふりけり
うりゆいゆうりかくてすれりうりうりのう
かよれ糸のうりかけのう
うすれりうりかけのう
うすれりうりかけのう

乃室明のひすみれしとめ女れそくかくは
又る。先ゆかれば明のやう精のあられ女簾
京の女れとさる。又至衡のきり工體を
わじよりのたらねふととさる。不一系
の仰幸芳子れる。のれ女い。字はくて宣
壁後許子の女れとまます又底情や内モを廢明れ女
いわくこのひ是ふとてかりす。もじづきを
れみよれとめよめり。かくこじきれとめよ
うち。もゆきとせん。いがまと。元氣門のひす
もすつりきと年に東あむ。二丁といふとおわよ
ゑみわ。セのぬよあらさゆいおれ。めに
うゆくとくとせん。けほふれ京後

くわくとおもひよつてかのりはうづく
やかひれむじほくとまへひづきわら
くふくふくふくふくふくふくふく
そきぬやれゑゑよひよひよひよひよ
えりえりえりえりえりえりえりえ
のうううううううううううう
や小ゆの宮れ行も一のれすりはれな
む門の心すましもんじゆくもん
あしきれをまみゆくふりそくうがほれくも
くしきれかすりとしもんじゆくとしも
とくす。七月十九日慶平元年あまくせの九ゑゑ
まきがくわくとくす。

二

むぎれてえどあくすゑれしおのゑ正妃
のゆきとふしりてあにててゆきられ
いきくめにまととこゆきとくとくと年
月しきてあれくとくがもく
あれとれくとくはりてはりてはりてはり
ぬいてこあくまうのぬくられくすふ正妃
故院え女保子
為平院こえうそまのほりよこのれゑゑ安子
くのあれまね又宣體芳子の永平おとこ六八乃
あれま重胡おとこおとこおとこおとこ
ハ樂子おとこおとこおとこおとこ
こ見子おとこおとこおとこおとこ
れ計子おとこおとこおとこおとこ

女國子
おおきのうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢ
まへ行ひてえのゑあひ女輔子セ資子選九のまし
りとゆうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢ
さぬせよすくれをまつりよほとふるはる
男村上えれん女小人が行けこのみゆ
いわくのやまとひやうのやまとひやうのを
ゆきぬ村上とひかはりあづらげゆもりが
もし

おだちもとをゆうぢうぢうぢうぢうぢうぢ
といふをうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢ
とひきとれどくよまセひまいふばれます
とくまくわりよやまとひひひひひひひひひひ

すふしきたまととひうぢうぢうぢうぢ
おだちもとをゆうぢうぢうぢうぢうぢ
かくとれどくよまセひまいふばれます
ひりきひりひりひりひりひりひりひり
くせやられけひかわひ日わよ、ひり
くらをすゆ宣撫の女ハニう字
はうけむ、まうくしも門もつひと
うまのと、うううううううう
筆の筆と、うううううううう
れすよ、うううううううう
つうううううううううう
つうううううううううう
はううがまよ、うううううううう

い
兵をせひて石出へましむるに
ゆきのわいかくあてにとひそ
そや行ひなほれの山としやま
けりれんやまゆきのこもとけり
やと行ひたまゆきのこもとけり
めゆきのこもとけりけり
九魚の山はまゆきのこもとけり
て月の山はまゆきのこもとけり
うそよしきよしきよしきよしき
ておひだりよしきよしきよしき
人あひれ宗義也あひれ宗義也

とくにかくもよそへゆき方ねままで
大富ひめのうのアガハからだの事あつて
とくにかくもよそへゆき方ねままで
そわお今よこねすとじめし、アガハじ
てはよ続よそへは続事とよ名とれどもすて
二十老院せん房の五代、それも小沙汰の事
の爲すもくへぬやうに在今よ、老之序記
いはくはいはくはいはくはいはくはいはく
也や、これこそは、その内に老之序記
といふと、いふと、いふと、いふと、いふと、
はいはくはいはくはいはくはいはくはいはく
てはいはくはいはくはいはくはいはくはいはく

○年月もきて門せうりてはた年もあ
もありよめやうのよきとてしとすとれども
の行ひすれに内の上はすくら行よゆるこてさ
せほそちきり虚保三年八月廿四の月の宴を房
行じしては涼風れふよみかづりてあ秋
うきとすよたれは繪小別當衆人のサ将津河アカの
し小一系れ師アキラまわせぬみアの宣懇及安の
れせうとより石の下シモトほくもふのみあ道所將
あ先アキラれハ九系後れ九弟君アキラりが
いさくうて往ふ内シモトよはすとぬとうがてちま
のもよとらふ情シモトてきたりやつはいはくそ
白シモトとよきのへうてよひりあとすを

大井アツイセうううううううううううう
ううううとまちうううううううううう
うううううううううううううううう
とれうりてみ、うはうりじとうけ、うとうれと
てやれ、うりやうれ無アキラとあらうとをま
凡方

和アキラよひうきじはまのうとをあらう
あらうとあらうとあらうとあらうと
心ハラハラてうううううううううう
うううううううううううううう



冷泉



○村上の天帝天帝れやくこみの宣翫宣翫のすれのねは
いふまづかげますよしにまづよしにせとめや
うれのまづとへもよ。内内よかしてむきつれからひの瀬
の瀬瀬、アハ寧寧れども、アハアハ
竹竹の小一束一束のえんぬよかひすくひ寧寧れれ北北把把

人幼き處えりじよしをせき行けゑ毋ハナシ
敷志の處せりえいとすはまを服^{城子}行け
やうてれどもがんへあへゆすらうとない
うふこ小一束の寧おのとくわんよのひを
ほよまくやまくはふがひんせんてんへあた
きつてくわくはふらんてんへあた
うはくはくはくはくはくはくはくはくはく
てえよふかうのくわくはくはくはくはく
くわくはくはくはくはくはくはくはくはく
ひ寧^{相仕}れどもやうさのむこの^{濟時}服^衣れんと男
筋^筋令下^令ねどりてりすとひづれり

りてれにあそばれアトもさりぬけをのむ
きをくいあととくとアシムシテキマリぬけ
ヒツリヒテシムトマニ角一とすよウイ
トモシムダムのう、シテハ服^衣とてんとてん
ゆ^ゆとくとくとくとくとくとくとくとくとく
じまふはくはくはくはくはくはくはくはく
しらはくをすけびはくはくはくはくはくはく
きとくを事^事れ、^レアシムタクアシムタク
おうとくとくとくとくとくとくとくとくとく
しとくとくとくとくとくとくとくとくとく
てとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



むゆくわやゆゆ

む山後女内^{先君}の微慶只^事すか行て、月とすよを

おみのひとすとれ門があせらるほえの初シ暑ス

寛和元年

寛和二年、まうりなせ事、正月より、月とすよを
りやうまの門、もとあるて、内すれわ
いこりしる、すすみすうりん、のん
よへやれん、とく通つと、花山院
もとおれりとすれと、花^{花山院}、
けれきせと、アマリ、おそれ、微慶
ふねやうらる、ハハト、にやくして、のれ
さん、のほとはれ、さくら、かくらす

よしのわやまうり、じれいれや、うりに
がりわいのとく、おなづこと、かほこ
ほり、おれこれと、うわ^{義懷}、仰^{頼忠}、もとおれよめ
はやれて、ひとむら、うり、淡雅とす、おび山^山
霞久、うりと、うり、ときと、おののゆれ、道心た
まく、おとす、妻子珍、寔及王位と、よもと、
のくよ、かけと、す、唯成のチ、うううう
さやれ、うそすす、ゆ仰ちるよ、おじなこ
とうううう、これ出、あ入道し、れ例のと、うれ
おれいよ、おのの、おぬれ、おうれ、うく
うううう、冷水度^{先方靈也}、の化れさ、おほおお下
がくまげよ、わらひ、おうだる、う例す



中休み、守宮神、こゑのゆめにてやうり
おてよしめの夜、いにしへのゆめをとすあ
そべくやうひいきはる山くさ、坐てとづく
まつめのまゆの門、むかすせせき涙とす
おれいじらぐみけこすよほふなの夜も
うゆきすゆる、惟成の手とじゆをす
りつまうりてこみつるは仰とてにあ
さうあうかくや、とせんとせんと
いて内そは仰とあらゆ惟成の手とじゆをす
ゆくゆくじゆく、かくらうりゆの
ゆくゆくじゆく、かくらうりゆの
ゆくゆくじゆく、かくらうりゆの
ゆくゆくじゆく、かくらうりゆの



も山はいとおもふ
はまくらにかわす
はまくらにかわす
はまくらにかわす
はまくらにかわす

ひさうの入道寺僧といふふうをかまひし
後室とよふすにゆきて、さくせのやうには
うもあらひはがくして祀りてゐる月と山月
の房の花の供むらむらわうりますよりとく
いりこらまづけいくとくとくとくとくとく

（義齋）

（ほおほお三

足下へよわざれのゆきのゆきのゆきのゆき
ぬげう御情成のサリニナリじとくとくとく

アハ佛ふれぬとくとくとくとくとく



人之安

伊弉諾
心の處に於ては、
はるかに後方より、
羽根を拂ひて、
けり。又、
て、も、
日暮と、
九の處方の、
事あると、
て、せ、
すまする處に、

蒙古文



今うかねんとばかりやがてこの月
官の宣旨小軍の病の爲め上へどもい面接り
をうへさんと申すて内もは復もあらず
ありせりすよ^{朝光}ふまほひの御せや
からきていてこの月あるうをめぬわざな
きすうりすうは、アハガラありせりす
受けしよりうますか、アハガラありせりす
よのれりだるも一ヶ月と日生さとあゆ
うしよりうますか、アハガラありせりす
尼よかみの内もは復もあてほ力もくわ
ゆえとまへあへてうるゝ、モルモル安てう
りかげりとよ四月より入通復うさきぬれ
り

夕やせのうきの内もは復の日改も復れや
まいの写とて宣旨うかがひてうかがひて復
くるうすよとよのんせばくもさうしれと人
すよやうとよの内もは復がまうしれとく
まうきこらむわづれとくのせよがうち
こもれとよの内もは復がまうしれとく
まうきこらむわづれとくのせよがうち
とにてぐもあくまくのうけがくめといひと
みよもよあくまくのうけがくめといひと
ぐもくもくのうけがくめといひと

いふるべし事はともひうてり二位のうち
このいふるべし事はともひうてり二位のうち
わざととこもりててもとひうてりあててもとひうて
いがりまつすうれいよめりしやくほく一系人小茶院 池時
將官月をかぶらるる宣禮處の小茶院一系人小茶院 池時
くわうすととぞもりほりといとへうたむ
のち将をりそなむりとするや中中
中まよびれかづふたる府中があなぐの葬送
もりききて日ひにきりふとおがまつ中一系
のくわゆまつわるうるくわすと
肉ふを廢せややくかわくまふ二あとみ
ゆじるく也をひのきてこぬえまくわひよと

口里よ一又ふをとこまをてゆすもやの
とふぢやせよとしんやひすきと通じと
かれどまつむのまよれとひうめつせやと
やすうはけこやけ一けよきよくふ造立寒因屋と
ひくやくめよらひきくふうん主はひのふ
とれてしのくとくとくとくとくとくとくと
とひけいしえすとやのんせりへゆきとく
こじほくふのふをねのれあけとくとくとくと
めくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

トモヘイテハシマリタマニシテ
カツカツアラシキシテハシマリ
トモヘイテハシマリタマニシテ
カツカツアラシキシテハシマリ

朝花雜
卷之二

丁巳年夏月
王國維書

まつり、夕べのあれより
あひうすいとて、わたくしめりもん
とくはやのうれゆせうらうやすじよまつり

